



シーボルトの  
「パリの桐」

*Philipp Franz Balthasar von Siebold*

*Paulownia*





五月の初旬、パリの街角の至る所で満開の「[桐の花](#)」を目にした。薄紫色のその花は白い壁に良く似合い、フリージャーを強くした臭いをふりまきながら、上品で知的なパリのエレガンスをかもし出していた。が、しかしその「桐」は、江戸時代にシーボルトが日本から持ち帰ったものだと知った・・・

フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト(1796～1866年)Philipp Franz Balthasar von Sieboldドイツの医師・博物学者・・・

ドイツ人シーボルトは、祖父の代から貴族階級に登録され、姓の前に貴族階級を意味するフォン(von)が付くドイツ医学界の名門シーボルト家に生まれた。けれど、シーボルトが1歳1ヶ月の時、父親ヨハン・ゲオルク・クリストフ・フォン・シーボルトは31歳の若さで亡くなる。しかし、ヴェルツブルク大学の内科学、生理学教授の母と母方の叔父に育てられ、1815年にヴェルツブルク大学に入学し、医学をはじめ、動物、植物、地理などを学ぶ。その後、東洋研究を志し1822年にオランダのハーグへ赴き、国王[ヴィレム1世](#)の侍医から斡旋を受け、7月に[オランダ領東インド](#)陸軍病院の外科少佐に任命され、その年の9月にロッテルダムから出航し、喜望峰を經由して1823年4月にはジャワ島へ至り、6月に日本の長崎に到着する。シーボルト27歳・・・

シーボルトは日本の鎖国時代の対外貿易港であった長崎・出島のオランダ商館医となり、出島内において開業し、1824年には出島の外に「[鳴滝塾](#)」を開設し、日本各地から集まってきた多くの医者や学者に西洋医学(蘭学)教育を行う。1826年4月に[オランダ商館長\(カピタン\)](#)の江戸参府に随行。道中を利用して、日本の自然を研究することに没頭し、地理や植生、気候や天文などを調査し将軍家斉に謁見。江戸においても学者らと交友を重ねる。その間に長崎で日本女性の[楠本滝](#)との間に、娘・楠本イネをもうけ(イネとは日本の主食の米の稲から命名したらしい)日本原産の[ガクアジサイ](#)の学名は現在はHydrangea macrophyllaだが、当時、新種記載した際に、愛する滝の名を取りHydrangea otaksa(オタクサ・お滝の愛称でオタクサンと呼んでいたらし)と命名している。当時、故郷の伯父に宛てた手紙が残っている「小生もまた古い祖国の風習に従い、目下愛くるしい16歳の日本の女性と結ばれました。小生は恐らく彼女をヨーロッパの女性と取替えることはあるまいと存じます・・・」

しかし、文政11年(1828年)9月に長崎を出航するオランダ船ハウプトマン号は嵐に遭って座礁し、その荷箱の中から、御禁制

の品が続々と発見され、収集品の中に幕府禁制の日本地図があったことが問題となり、国外追放処分となり、世に云うシーボルト事件がおこる。彼は翌1829年に長崎・出島から、小舟で手を振る滝と娘イネ(2歳)に見送られながら祖国に帰国する。シーボルト33歳・・・

そのとき彼は、日本滞在中の7年弱の間に「Nippon」「日本動物誌」「日本植物誌」などを著し、植物や動物などや化石、地図や、当時の出島出入り絵師だった川原慶賀に生物や風俗の絵図を多数描かせたり、ありとあらゆる生活用品を収集することに精力を傾け、約2万5千点余から成る壮大な日本コレクションをヨーロッパに持ち帰った。それは俗に、ジャポニズムブームの導火線に火を付けたとも云われている・・・

シーボルトが持ち帰った藤や桐、ガクアジサイやハマナスなどは、ヨーロッパで珍重されたり、品種改良されながら西欧各地に広がった。特に「桐」はパリの街の公園やロータリー、地下鉄の出入り口など、人目に付く場所に植えられ、日本人が桜を愛でる様に市民に愛された・・・

その後のお滝さんは・・・

当時、長崎では洋妾(ラシャメン)として、日本に駐在する外国人の軍人や商人と婚姻し、現地妻となった女性が多く存在していた。世界の列強支配の中で情報が入り交じり、今で云う江戸時代の幕末におけるグローバルスタンダードの波が押し寄せ、ものの価値基準や金銭感覚はごちゃ混ぜ状態で、エリアは今で云う所の経済特区ごときでもあり、当然、日本で一番、猥雑(わいぎつ)な街であったと思われる。そして、下級の軍人が揚屋などの売春宿などに通って欲望を発散する一方、金銭的に余裕がある高級将校などは居宅に女性と暮らし、婚姻届は鎖国から開国にいたる混乱期の日本で、長崎居留の外国人と日本人女性との同居による問題発生を長崎奉行が管理し公認していた。女性も農家から長崎の外国人居留地に出稼ぎに来ていた娘であり、生活のために洋妾になり、飽くまでも一時的なもので、互いに割り切った関係であった。当然の事ながら、シーボルトの日本人妻だった楠本滝も、シーボルト帰国の2年後に築町の商人俵屋時次郎と再婚するが、時次郎は44歳の若さでこの世を去る。その後、シーボルトが国外退去を命じられてから30年後の1859年(安政6年)シーボルトが再来日する直前に、お滝がシーボルトへ宛てた手紙が発見されている・・・

「・・・おイネの顔立ちがあなた様に似ているのを見るにつけ、もしあなた様がいらっしゃったら、さぞかしお喜びになるでしょうが、それをお知らせしようにも国の掟にさえぎられ、あなた様のおいでになる西の方に向かって独りつぶやくのみでございました・・・」当時シーボルト63歳、お滝53歳、お稲33歳・・・

(上記手紙は、詳しくは以下のサイトでご覧下さい↓)

[http://www2.ocn.ne.jp/~oine/letter\\_otaki/index.html](http://www2.ocn.ne.jp/~oine/letter_otaki/index.html)

お滝は再婚した俵屋時次郎が44歳で亡くなった後は、娘・楠本イネと銅座町55番戸の家でイネは医院を、お滝は油屋などを営みながら死ぬまで同居していたようだ。お滝は死ぬ間際に、シーボルトと一緒に食べたオランダイチゴが食べたいと言い、イネが探し求めて手に入れたイチゴを美味しく食べ、これで思い残すことはないと言って明治維新後まもなくの1869年に63年の生涯を閉じる・・・

そしてシーボルトは・・・

帰国後、日本学の祖として名声が高まり、オランダ政府の後援で日本研究をまとめ、故国ドイツのボン大学にヨーロッパ最初の日本学教授として招かれるが、固辞してライデンに留まり、日本の開国を促すために運動し1844年にはオランダ国王ヴィレム2世の親書を起草する。お滝と別れ、離ればなれになってから15年後の、48歳にあたる1845年ドイツ貴族出身のヘレーネ・フォン・ガーゲルンと結婚し、3男2女をもうける。

日本は1853年(嘉永6年)7月4隻の巨大な黒船が浦賀沖に出現。翌年の1854年(嘉永7年)3月ペリー率いるアメリカ艦隊7隻の軍艦が伊豆下田沖に現れ「日米和親条約」を締結し開国する。1858年には日蘭通商条約が結ばれ、シーボルトに対する追放令も解除され1859年オランダ貿易会社顧問として、息子アレクサンダー・フォン・シーボルトと共に再び来日する。シーボルト63歳・・・

再来日したシーボルトは長崎で、お滝や娘・イネと再会し、長崎・鳴滝に住居を構え昔の門人と交流する。しかし1861年には対外交渉のための幕府顧問となるが、衰え行く徳川幕府に別れを告げたかの様に1862年に官職を辞して帰国し、1866年ミュンヘンで70年の生涯を終えた。その翌年の1867年に徳川幕府は大政奉還し、日本は明治維新を迎える・・・

シーボルトの娘・楠本イネは(愛称・おらんだおイネ)・・・

シーボルト門下の宇和島藩二宮敬作から医学の基礎を学び、石井宗謙から産科を学び、村田蔵六(司馬遼太郎・著「花神」の**大村益次郎**)からオランダ語を学び、安政6年からヨハネス・ボンペから産科・病理学を学び、文久2年からボンペの後任アントニウス・ボードウィンに学んだ。後年、京都で大村益次郎が襲撃された後にはボードウィンの治療のもと、大村を看護し、その最期を看取っている・・・

1871年(明治4年)異母弟にあたるシーボルト兄弟(兄アレクサンダー、弟ハインリッヒ)の支援で東京は築地に開業し、日本最初の女医となる。福沢諭吉の口添えにより宮内省御用掛となり、明治天皇の女官葉室光子の出産に立ち会うなど、その医学技術は高く評価された。その後、1875年(明治8年)東京の医院を閉鎖、郷里・長崎に帰郷し、産婆を開業する。62歳の時、娘・高子(山脇たか)一家と同居のために長崎の産院も閉鎖し再上京、医者を中心に廃業し、以後は**弟ハインリッヒ**の世話になり余生を送り1903年に77年の生涯を終える・・・

シーボルトの長崎から始まる幾歳月に及ぶ人々の織りなすドラマは、日本と西欧の垣根を超え、人々との幾多の友情を育んだ。国境を超え持ち帰られたものは、日本の自然の一部で、かつ固有の文化を生む根幹にあたる植物や動物の品種の種子(Seed)たちであり、特に「桐」は「木と同じ」と書き、木のようにいて木ではなく、学問的にも樹木より草に近いらしく、ゴマノハグサ科に分類されるが、生長の早さも樹木では群を抜いていて「コノ木切レバ早く長ズ、故ニキリト云ウ」とあり、その語源は「切り」にあると云うが、古くから良質の木材として重宝されており、鳳凰が棲む神聖な木として扱われ、皇室・朝廷の副紋でもあり、**五七桐**は政権担当者の紋章であり「**日本国政府の紋章**」として大礼服や旭日章の意匠にとり入れられたり、菊花紋に準じる国章としてパスポートなどの書類の装飾に使われたり「**内閣総理大臣の紋章**」として官邸の備品や総理の演台に取付けられるプレートにも使われている・・・

そもそも美なるものは、その土地柄や風土が持つ自然の中に内存され、かつ進化し生き続け、自然のしぐさがその地の人々の感性をはぐくみ、その地の固有の文化を生み出して来た。が、持ち帰られた日本固有の美であるシーボルトの「桐」は、パリの人々の心に根を張り、あたかも江戸期の浮世絵が印象派の絵にとけ込んだごとく、日本とは違ったパリ人の感性で、その日本固有の美は進化、融合され、おおよそ180年余の歳月を通し、街角で目にした、日本には無い、見事な「パリの桐」を創り出したようだ・・・

日本から「桐」をヨーロッパに持ち帰ったシーボルトは、学名をパトロンであった**オランダの女王**の名前、ポローニア(仏): **Paulownia** (学名: *Paulownia tomentosa*)となぞけた・・・花言葉は「高尚」・・・

「桐」は、日本と西欧の、感性・価値基準値?を計ったとすれば、見事に同じ基準値の位置に並べられたと云えようか?・・・

シーボルトは1862年に帰国後、1866年にミュンヘンで帰らぬ人となり、70年の生涯を終える。その時、日本は1866年薩長同盟→1867年大政奉還→徳川幕府は終わりを告げ、明治維新の幕が切って落とされ、この国は西欧化の道を歩み始めた・・・

(以下・日本人が見た「パリの桐」のサイト↓)

パリ・散策／パリの街路樹 | フランス日本語ガイド通訳協会(AGIJ)

<http://www.agij-paris.com/paris01/14.html>

2010年5月12日・雨の日も又～桐の花が見事(パリ17区ーフランス) | フランスと日本の衣食住

<http://rurumba.exblog.jp/13684010/>

パリの桐祭り<No.1>inフランス/2005年05月22日(日) | 永野寿子の夢日記

<http://yaplog.jp/juriano/archive/134>

桐の花 ポローニヤ Paulownia | パルファンサトリの香り紀行

ここ、パリのルクサンブルグ公園は桐の林があり、紫の雲の様である。日本では、こんなにいっぱい桐の花を見たことがない・・・

<http://parfum-satori.com/blog/2010/06/paulownia.html>

2010-05-03／桐の花、満開 | 今日のパリ

<http://blog.shopper.co.jp/paris/2010/05/post-9bf8.html>



<http://mouton07.seesaa.net/article/96735666.html>

（注意：PDFおよびePubではリンクしていない場合があります）

（以下・主要参考文献↓・注：本文中にリンクさせています）

<http://ja.wikipedia.org/wiki/キリ>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト>

[http://ja.wikipedia.org/wiki/ウィレム1世\\_\(オランダ王\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/ウィレム1世_(オランダ王))

<http://ja.wikipedia.org/wiki/オランダ領東インド>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/鳴滝塾>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/オランダ商館>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/カピタン>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/アジサイ>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/シーボルト事件>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/川原慶賀>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/洋妾>

～シーボルト再来日直前のお滝さんの手紙を発見～

[http://www2.ocn.ne.jp/~oine/letter\\_otaki/index.html](http://www2.ocn.ne.jp/~oine/letter_otaki/index.html)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/アレクサンダー・フォン・シーボルト>

楠本 イネは、日本の医師。フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの娘。楠本は母楠本瀧の姓。

日本人女性で初めて産科医として西洋医学を学んだ事で知られる・・・

<http://ja.wikipedia.org/wiki/楠本イネ>

大村益次郎は、幕末期の長州藩の医師、西洋学者、兵学者である。維新の十傑の一人に数えられる・・・

<http://ja.wikipedia.org/wiki/大村益次郎>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/楠本高子>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ハインリッヒ・フォン・シーボルト>

桐紋(きりもん)とは、ゴマノハグサ科の桐をもとにした家紋の総称である・・・

<http://ja.wikipedia.org/wiki/桐紋>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/国章>

総理の演台などにとりつけられる「内閣総理大臣紋章」のプレート・・・

[http://ja.wikipedia.org/wiki/内閣\\_\(日本\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/内閣_(日本))

<http://ja.wikipedia.org/wiki/アンナ・パヴロヴナ>

（注意：PDFおよびePubではリンクしていない場合があります）

